

令和7年度 農作物病害虫発生予察情報 発生予報 第5号（9月予報）

令和7年8月26日 秋田県病害虫防除所

◇今回の予報対象期間は9月を主とします。次回の発表は令和7年9月25日の予定です。

◇病害虫発生予察情報は秋田県公式ウェブサイトで閲覧できます。

<https://www.pref.akita.lg.jp/bojo/>

◇最新の農薬登録状況は、農林水産省ウェブサイト「農薬登録情報提供システム」で確認してください。<https://pesticide.maff.go.jp/>

◇秋田県総合防除計画は秋田県公式ウェブサイトで閲覧できます。

<https://www.pref.akita.lg.jp/pages/archive/4233>



秋田県病害虫防除所
トップページ

◎8月19日から的大雨に対する農作物の病害虫防除

浸水・冠水などにより、農作物全般で根傷みや茎葉の損傷が発生するとともに、草勢・樹勢低下により病害虫への抵抗力が低下しています。病害虫の発生動向に注意してください。

- 1 ほ場を丁寧に見回って病害虫の発生をよく観察し、早期の発見・防除に努めてください。
- 2 病害には感染後3～5日程度の短期間で発病するものの他、7～14日後に発病が見えてくるものもあるので、ほ場の見回りや観察は継続して実施します。また、病害の予防として殺菌剤を発病拡大前に散布してください。
- 3 殺菌剤、殺虫剤ともに降雨により残効期間が短くなるため、降雨が続く場合には散布間隔を短くしたり、雨前・雨間散布に努めてください。
- 4 薬剤防除する場合は、散布後の高温により薬害が生じやすいので、朝や夕方涼しい時間帯に行ってください。

I. 予報の要点

水 稲	斑点米カメムシ類の対策として、水田内に出穂したホタルイなどのカヤツリグサ科雑草やノビエが発生しているほ場、斑点米カメムシ類の発生源となるイネ科植物が主体の牧草地や休耕田などに隣接しているほ場では、出穂期24日後頃に、畦畔を含めたほ場全体に茎葉散布剤を散布してください。農道・畦畔及び雑草地の草刈りは、稲の収穫2週間前以降に行ってください。
大 豆	吸実性カメムシ類の発生量が多いと予想されます。発生が多いほ場では、カメムシ類に効果が高い薬剤を選択してください。
野 菜	病害では、きゅうりの褐斑病の発生量が多いと予想されます。発病した葉や茎、果実を除去した上で薬剤防除に努めてください。 害虫では、ねぎ（秋冬どり）のシロイチモジヨトウ、野菜・花き共通のオオタバコガの発生量が多いと予想されます。8月21日発表の防除対策情報第12号、13号を参照してください。
果 樹	りんごでは、輪紋病、褐斑病、シンクイムシ類、ハダニ類の発生量が多いと予想されます。降雨が続くと予想される場合や発病又は被害が認められる園地では散布間隔を短くして防除してください。 りんごとなしの果樹カメムシ類の発生量が多いと予想されます。園内への飛来が多い場合は7月25日発表の注意報第3号を参照し、防除対策を徹底してください。

Ⅱ. 主要病害虫の向こう 1 か月の予報

作目名	病害虫名	対象地域	発生時期	発生量	
				現況	予報
水 稻	斑点米カメムシ類 (アカスジカスミカメ) (アカヒゲホソミドリカスミカメ)	全県	—	少ない	やや少ない
				少ない	やや少ない
				少ない	やや少ない
大 豆	吸実性カメムシ類 (ホソヘリカメムシ)	全県	—	やや多い	多い
	フタスジヒメハムシ	全県	—	やや少ない	平年並
	マメシンクイガ	全県	—	やや少ない	やや少ない
ね ぎ (秋冬どり)	さび病	全県	—	やや少ない	少ない
	黒斑病・葉枯病	全県	—	少ない	少ない
	アザミウマ類 (ネギアザミウマ)	全県	—	少ない	平年並
	ネギハモグリバエ	全県	—	平年並	やや多い
	シロイチモジヨトウ	全県	—	多い	多い
きゅうり	褐斑病	全県	—	やや多い	多い
	黒星病	全県	—	やや少ない	少ない
	炭疽病	全県	—	平年並	やや多い
キャベツ (秋冬どり)	黒腐病	全県	—	平年並	平年並
	コナガ	全県	—	やや少ない	平年並
	モンシロチョウ	全県	—	平年並	やや多い
	ヨトウガ (第2世代)	全県	—	平年並	やや多い
トマト	葉かび病	全県	—	平年並	平年並
	すすかび病	全県	—	平年並	平年並
	灰色かび病	全県	—	平年並	平年並
	コナジラミ類 (オンシツコナジラミ)	全県	—	平年並	やや多い
野菜・花き 共通	オオタバコガ	全県	—	—	多い
	ハスモンヨトウ	全県	—	—	やや少ない
りんご	斑点落葉病	全県	—	平年並	平年並
	炭疽病	全県	—	平年並	平年並
	輪紋病	全県	—	多い	多い
	褐斑病	全県	—	多い	多い
	シンクイムシ類 (モモシンクイガ)	全県	—	多い	多い
	ハダニ類 (ナミハダニ、リンゴハダニ)	全県	—	やや多い	多い
	果樹カメムシ類 (チャバネアオカメムシ、 クサギカメムシ)	全県	—	多い	多い

作目名	病害虫名	対象地域	発生時期	発生量	
				現況	予報
な し (日本なし)	黒星病	県北部・県中央部	—	やや少ない	やや少ない
	黒斑病	県北部・県中央部	—	平年並	平年並
	輪紋病	県北部・県中央部	—	平年並	少ない
	シンクイムシ類 (モモシンクイガ)	県北部・県中央部	—	平年並	やや多い
	ハダニ類 (ナミハダニ、リンゴハダニ)	県北部・県中央部	—	平年並	やや多い
	果樹カメムシ類 (チャバネアオカメムシ、 クサギカメムシ)	県北部・県中央部	—	やや多い	多い
ぶどう	べと病	県南部	—	やや少ない	やや少ない
	晩腐病	県南部	—	平年並	平年並

Ⅲ．発生予報と防除対策

A 水稻

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 斑点米カメムシ類 (アカスジカスミカメ)	—	やや少ない(前年よりやや少ない)
(アカヒゲホソミドリカスミカメ)	—	やや少ない(前年よりやや少ない)
	—	やや少ない(前年より少ない)

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /+）。
- イ 8月3～4半旬の巡回調査（80地点）における水田内でのアカスジカスミカメのすくい取り数は0.6頭（平年1.1頭）で少なく、発生地点率は20.0%（平年23.2%）でやや低かった（ /-）。
- アカヒゲホソミドリカスミカメのすくい取り数は0.0頭（平年0.2頭）で少なく、発生地点率は1.3%（平年7.8%）で低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 斑点米は、登熟期後半から発生する割れ粳の増加に伴い、側部斑点米が主体となるので、2回目の防除が重要となる。そのため、水田内に出穂したホタルイなどのカヤツリグサ科雑草やノビエが発生しているほ場、斑点米カメムシ類の発生源となるイネ科植物が主体の牧草地や休耕田などに隣接しているほ場では、出穂期24日後頃に、畦畔を含めたほ場全体に茎葉散布剤を散布する。
- イ 茎葉散布剤は、キラップフロアブル・同粉剤D L（使用時期は収穫14日前まで）又はエクシードフロアブル・同粉剤D L（使用時期は収穫7日前まで）とする。
- ウ 殺虫剤を散布する際は、養蜂業者などと連携をとり、蜜蜂などへの危害防止に努める。
- エ 農道・畦畔及び雑草地（法面や休耕田など）の草刈りは、稲の収穫2週間前以降に行う。

B 大豆

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 吸実性カメムシ類 (ホソヘリカメムシ)	—	多い（-）

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。
- イ 8月5半旬の巡回調査（16地点）における25株当たり成幼虫数は0.2頭（平年0.3頭）、発生株率は0.8%（平年0.8%）でいずれも平年並だった（ /±）。
- ウ 秋田市予察ほのフェロモントラップにおけるホソヘリカメムシ成虫の8月1～4半旬の誘殺数は20頭（平年11.5頭）で多かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア アグロスリン乳剤、パーマチオン水和剤などで防除する。
- イ 無人航空機で防除する場合は、スミチオン乳剤、トレボンエアー、トレボンスカイMCのいずれかを2回散布する。
- ウ 薬剤は莢によく付着するように散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 フタスジヒメハムシ	－	平年並（－）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の気温は高いと予報されている（ /＋）。
- イ ８月５半旬の巡回調査（１６地点）における２５株当たり成虫数は０．１頭（平年０．２頭）でやや少なく、発生株率は０．３％（平年０．７％）でやや低かった（ /－）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア 多発ほ場はアグロスリン乳剤などで防除する。
- イ 薬剤は莢によく付着するように散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3 マメシンクイガ	－	やや少ない（－）

（１）予報の根拠

- ア ８月５半旬の巡回調査（１６地点）における叩き出し成虫数は０．１頭（平年１．１頭）でやや少なく、発生地点率は６．３％（平年２５．４％）で低かった（ /－）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア 連作により密度が高まり被害が増大するので、連作ほ場では防除を徹底する。
- イ 薬剤は次のいずれかを散布する。
- ① アグロスリン乳剤、アディオン乳剤、パーマチオン水和剤は９月上旬までに１回散布する。
 - ② エルサン乳剤、グレーシア乳剤、スミチオン乳剤、トレボン剤（粉剤ＤＬ、乳剤、ＥＷ）、プレバソンプロアブル５、ヨーバルフロアブルは９月上旬に１～２回散布する。ただし、前年多発したほ場では２回散布とする。
 - ③ 無人航空機で防除する場合は、スミチオン乳剤、トレボンスカイＭＣ、プレバソンプロアブル５のいずれかを９月上旬に２回散布する。
 - ④ エルサン乳剤、トレボン剤、プレバソンプロアブル５は成分の総使用回数に注意する。
- ウ 薬剤は莢によく付着するように散布する。

C ねぎ（秋冬どり）

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 さび病	－	少ない（前年よりやや少ない）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /－）。
- イ ８月４半旬の巡回調査における発病株率は０％（平年２．０％）でやや低かった（ /－）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア 発病が多くなってからでは防除効果が劣るので、発病初期からアミスター２０フロアブル（ＲＡＣコード：１１）、オンリーワンフロアブル（同：３）、カナメフロアブル（同：７）などを散布する。
- イ 耐性菌の出現を回避するため、ＲＡＣコードが３、７、１１の薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 黒斑病・葉枯病	－	少ない（前年より少ない）

（１）予報の根拠

ア 向こう１か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ ８月４半旬の巡回調査における発病株率は1.0%（平年5.5%）で低かった（ /－）。

（２）防除上注意すべき事項

ア 適正な肥培管理を行う。

イ 本県における秋季の発生は、葉枯病が主である。葉枯病が原因の黄色斑紋病斑は、収穫物の品質低下につながるので、アミスター20フロアブル、カナメフロアブル、ダコニール1000、テーク水和剤、パレード20フロアブルを組み合わせ、９月上旬～10月上旬に約10日間隔で散布する。

ウ さび病などの発生や害虫による食害は、本病の発生を助長するため、他の病害虫の防除も合わせて行う。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3 アザミウマ類 （ネギアザミウマ）	－	平年並（前年よりやや少ない）

（１）予報の根拠

ア 向こう１か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /+）。

イ ８月４半旬の巡回調査における食害株率は17.3%（平年32.2%）で低かった（ /－）。

（２）防除上注意すべき事項

ア 多発すると防除効果が劣るので、発生初期から、アグロスリン乳剤（ＲＡＣコード：3A）、アルバリン顆粒水溶剤/スタークル顆粒水溶剤（同：4A）、グレースシア乳剤（同：30）、ダントツ水溶剤（同：4A）、ディアナＳＣ（同：５）、ファインセーブフロアブル/アベンジャーフロアブル（同：34）、ベネビアＯＤ（同：28）などを茎葉散布、又はダントツ粒剤（同：4A）、プリロッソ粒剤オメガ（同：28）、ミネクトデュオ粒剤（同：28・4A）を株元散布する。

イ 抵抗性害虫の出現を回避するため、同一ＲＡＣコードの薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4 ネギハモグリバエ	－	やや多い（前年よりやや多い）

（１）予報の根拠

ア 向こう１か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

イ ８月４半旬の巡回調査における食害株率は12.8%（平年14.9%）で平年並だった（ /±）。

（２）防除上注意すべき事項

ア 多発すると防除効果が劣るので、発生初期から、アグロスリン乳剤（ＲＡＣコード：3A）、グレースシア乳剤（同：30）、ダブルシューターＳＥ（同：５・未）、ダントツ水溶剤（同：4A）、ディアナＳＣ（同：５）、ベネビアＯＤ（同：28）などを茎葉散布、又はダントツ粒剤（同：4A）、プリロッソ粒剤オメガ（同：28）、ミネクトデュオ粒剤（同：28・4A）を株元散布する。特に、多数の幼虫が集中的に加害する別系統（バイオタイプＢ）の発生が確認されているほ場では、防除を徹底する。

イ 抵抗性害虫の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5 シロイチモジヨトウ	－	多い（前年より多い）

（１）予報の根拠

ア 向こう１か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

イ ８月４半旬の巡回調査における食害株率は4.9％（平年1.0％）で高かった（ /+）。

ウ 防除適期決定ほ（２地点）のフェロモントラップにおける８月１～３半旬の誘殺数は801頭（前年56頭）だった（ /+）。

（２）防除上注意すべき事項

ア ８月21日発表の防除対策情報第13号を参照して防除する。

D きゅうり

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 褐斑病	－	多い（前年より多い）

（１）予報の根拠

ア 向こう１か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /+）。

イ ８月後半の巡回調査における発病株率は20.4％（平年18.0％）でやや高かった（ /+）。

（２）防除上注意すべき事項

ア 発病部位は早めに除去し、ほ場外で処分する。

イ 発病前からシトラノフロアブル（RACコード：M1・M5）、ジマンダイセン水和剤（同：M3）、セイビアーフロアブル20（同：12）、ダコニール1000（同：M5）などの予防剤を中心に散布する。発病を確認した場合は、スミブレンド水和剤（同：10・2）など、治療効果のある薬剤を散布する。また、耐性菌の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤は連用しない。

ウ ベンゾイミダゾール系剤（RACコード：1）、SDHI剤（同：7）、QoI剤（同：11）では耐性菌が確認されているので、防除しても効果が低い場合は異なるRACコードの薬剤を選択する。

エ 降雨が続く場合や病勢の進展が激しい場合は、薬剤の散布間隔を短くする。

オ 翌年への伝染源を減らすため、栽培終了後の株はほ場外で処分し、各種農業資材はケミクロンGなどで消毒する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 黒星病	－	少ない（前年より少ない）

（１）予報の根拠

ア 向こう１か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /－）。

イ ８月後半の巡回調査における発病株率は0％（平年0.8％）でやや低かった（ /－）。

（２）防除上注意すべき事項

ア 冷涼多湿条件で発病が多くなるので、山間高冷地では予防散布に努める。

イ 発病前から定期的にベフドー水和剤（RACコード：M7・M1）、ジマンダイセン水和剤（同：M3）、ダコニール1000（同：M5）などを散布する。発病を確認した場合は発病部位を取り除き、速やかにスコア顆粒水和剤（同：3）、トップジンM水和剤（同：1）などを散布する。

ウ 翌年への伝染源を減らすため、栽培終了後の株はほ場外で処分し、各種農業資材はケミクロンGなどで消毒する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3 炭疽病	—	やや多い（前年よりやや多い）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /+）。
- イ ８月後半の巡回調査における発病株率は13.5%（平年16.5%）で平年並だった（ /±）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア 発病部位は早めに取り除き、ほ場外で処分する。
- イ ジマンダイセン水和剤、銅水和剤などによる予防散布に努める。発病を確認した場合は発病部位を取り除き、アミスター20フロアブル（RACコード：11）、ゲッター水和剤（同：10・1）など、治療効果のある薬剤を散布する。薬害防止のため、アミスター20フロアブルには浸透性を高める展着剤を加用せず、高温時の使用は避ける。
- ウ 降雨が続く場合や病勢の進展が激しい場合は、薬剤の散布間隔を短くする。
- エ 耐性菌の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤は連用しない。
- オ 翌年への伝染源を減らすため、栽培終了後の株はほ場外で処分し、各種農業資材はケミクロンGなどで消毒する。

E キャベツ（秋冬どり）

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 黒腐病	—	平年並（前年並）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ ８月３半旬の巡回調査における発病株率は0%（平年0%）で平年並だった（ /±）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア 害虫の食害部分からも病原菌が侵入するため、害虫防除を徹底する。
- イ 銅水和剤（ヨネポン水和剤、Zボルドー、カスミンボルドー/カッパーシン水和剤）などを散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 コナガ	－	平年並（前年より少ない）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の気温は高いと予報されている（ /＋）。
- イ ８月３半旬の巡回調査における株当たり幼虫数は0.07頭（平年0.12頭）でやや少なかった（ /－）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア 発生初期で幼虫の密度が低い場合は、遅効性で残効の長い昆虫成長制御剤（ＩＧＲ剤）又はＢＴ剤を散布する。
- イ 発生が多い場合は、グレーシア乳剤（ＲＡＣコード：30）、プロフレアＳＣ（同：30）、アフーム乳剤（同：6）、スピノエース顆粒水和剤（同：5）、フェニックス顆粒水和剤（同：28）、プレバソンプロアブル5（同：28）などを散布する。なお、グレーシア乳剤、プロフレアＳＣ、フェニックス顆粒水和剤、プレバソンプロアブル5は2週間程度の残効があるので、防除回数を減らすことができる。
- ウ 抵抗性害虫の出現を回避するため、同一ＲＡＣコードの薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3 モンシロチョウ	－	やや多い（前年よりやや多い）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の気温は高いと予報されている（ /＋）。
- イ ８月３半旬の巡回調査における株当たり幼虫数は0.01頭（平年0.02頭）で平年並だった（ /±）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア コナガとの同時防除が可能である。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4 ヨトウガ（第２世代）	－	やや多い（前年よりやや多い）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の気温は高いと予報されている（ /＋）。
- イ ８月３半旬の巡回調査における株当たり幼虫数は0頭（平年0.01頭）で平年並だった（ /±）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア コナガとの同時防除が可能である。
- イ 老齢幼虫になると薬剤の効果が低下するので、若齢幼虫のうちに防除する。

5 その他病害虫の発生予報と防除対策

病害虫名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予報	
アブラムシ類 （モモカアブラムシ）	－	前年並	前年並	防除を要するほ場は少ないと見込まれる。

F トマト

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 葉かび病	－	平年並（前年よりやや少ない）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ ８月中旬の巡回調査における発病株率は21.2％（平年28.3％）で平年並だった（ /±）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア 多湿時に発生しやすいので、過度の灌水を避け、ハウス内の換気に努める。
- イ 発病部位は早めに除去し、ほ場外で処分する。
- ウ 潜伏期間が２週間と長いので、発病前からゲッター水和剤（ＲＡＣコード：１・１０）、ダコニール1000（同：M5）、ベルクト水和剤（同：M7）などを散布し予防に努める。
- エ 耐性菌の出現を回避するため、ＲＡＣコードが１、３、７、１０、１１の薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 すすかび病	－	平年並（前年より少ない）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ ８月中旬の巡回調査における発病株率は12.8％（平年13.7％）で平年並だった（ /±）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア 多湿時に発生しやすいので、過度の灌水を避け、ハウス内の換気に努める。
- イ 発病部位は早めに除去し、ほ場外で処分する。
- ウ 潜伏期間が２週間と長いので、発病前からダコニール1000（ＲＡＣコード：M5）などを散布し予防に努める。発病が確認されたらニマイバー水和剤（同：１０・１）、トリフミン水和剤（同：３）、ファンベル顆粒水和剤（同：１１・M7）などを散布する。
- エ 耐性菌の出現を回避するため、ＲＡＣコードが１、３、７、１０、１１の薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3 灰色かび病	－	平年並（前年より少ない）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ ８月中旬の巡回調査における発病株率は11.6％（平年12.4％）で平年並だった（ /±）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア 多湿時に発生しやすいので、過度のかん水を避け、ハウス内の換気に努める。
- イ 発病部位は早めに除去し、ほ場外で処分する。
- ウ 発病前からゲッター水和剤（ＲＡＣコード：１・１０）、ロブラール水和剤（同：２）、ベルクト水和剤（同：M7）、ミギワ10フロアブル（同：52）などを散布し予防に努める。
- エ 耐性菌の出現を回避するため、同一ＲＡＣコードの薬剤は連用しない。特にＲＡＣコードが１、２の薬剤は耐性菌が確認されているので、薬剤の選択に注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4 コナジラミ類 (オンシツコナジラミ)	—	やや多い (前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている (/+)。
 イ 8月中旬の巡回調査における発生株率は0% (平年0.1%) で平年並だった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア ハウス内外の除草に努める。
 イ 摘葉後、残さを早期に処分する。
 ウ 多発すると防除効果が劣るので、発生初期からトランスフォームフロアブル、モスピラン顆粒水溶剤などを散布する。

G 野菜・花き共通

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 オオタバコガ	—	多い (前年並)

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている (/+)。
 イ 防除適期決定ほ (3 地点) における8月1～3半旬のフェロモントラップの総誘殺数は397頭 (平年32.2頭) で多かった (/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 8月21日発表の防除対策情報第12号を参照して防除する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 ハスモンヨトウ	—	やや少ない (前年よりやや少ない)

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている (/+)。
 イ 防除適期決定ほ (2 地点) における8月1～3半旬のフェロモントラップの総誘殺数は632頭 (前年1,273頭) だった (/－)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 老齢幼虫になると薬剤の効果が低下するので、若齢幼虫のうちに防除する。
 イ 抵抗性害虫の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤は連用しない。
 ウ ジアミド系剤などの一部の薬剤に感受性の低下が疑われる事例があるため、使用薬剤の選定に注意する。

H りんご

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 斑点落葉病	—	平年並（前年よりやや多い）

（１）予報の根拠

ア 向こう１か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ ８月中旬の巡回調査における発病新梢葉率は2.6%（平年2.7%）で平年並、同地点率は80.0%（平年86.7%）でやや低かった（ /±）。

（２）防除上注意すべき事項

ア 発病部位を除去し、園地外へ搬出して適切に処分する。

イ アリエッティC水和剤（RACコード：M4・P7）、ダイパワー水和剤（同：M7・M4）、ナリアWDG（同：11・7）、ストロビードライフフロアブル（同：11）などから選択して散布する。

ウ ストロビードライフフロアブルを使用する場合は、耐性菌の出現を回避するため必ず保護殺菌剤（ベルコート水和剤など）に加用し、使用回数は２回以内とする。

エ イミノクタジンの開花期以降の総使用回数が３回以内であるため、本成分を含むダイパワー水和剤、ベルコート水和剤の使用回数に注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 炭疽病	—	平年並（前年より少ない）

（１）予報の根拠

ア 向こう１か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ ８月中旬の巡回調査における発病果率は0.02%（平年0.02%）、同地点率は5.0%（平年3.3%）でいずれも平年並だった（ /±）。

（２）防除上注意すべき事項

ア 園地の近くにあるニセアカシアは伐採する。

イ 二次感染防止のため被害果は見つけ次第摘み取り、土中に埋めるなどにより適切に処分する。

ウ 薬剤の選択及び注意事項は、１ 斑点落葉病のイ、ウ、エに準じる。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3 輪紋病	—	多い（前年並）

（１）予報の根拠

ア 向こう１か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ ８月中旬の巡回調査における発病果率は0.03%（平年0%）、同地点率は5.0%（平年0%）でいずれも高かった（ /+）。

（２）防除上注意すべき事項

ア 枝幹のいば病斑は削り取り、トップジンMペーストを塗布する。

イ 薬剤の選択及び注意事項は、１ 斑点落葉病のイ、ウ、エに準じる。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4 褐斑病	－	多い（前年より多い）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ ８月中旬の巡回調査における発病新梢率は0.7%（平年0.2%）で高く、同地点率は10.0%（平年6.1%）で平年並だった（ /+）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア 枝が重なった部分に多発するので、不要な徒長枝を除去する。
- イ 薬剤の選択及び注意事項は、１ 斑点落葉病のイ、ウ、エに準じる。
- ウ 発生の多い園地では薬剤の散布間隔を短くする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5 シンクイムシ類 （モモシンクイガ）	－	多い（前年より多い）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の気温は高いと予報されている（ /+）。
- イ ８月中旬の巡回調査における被害果率は0.3%（平年0.1%）、同地点率は10.0%（平年3.7%）でいずれも高かった（ /+）。
- ウ 防除適期決定ほ（４地点）における８月１～４半旬のフェロモントラップへの誘殺数の合計は359頭（平年198.5頭）で多かった（ /+）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア 被害果は摘み取り、その日のうちに水漬けし、６日以上おく。
- イ ピレスロイド系剤、ネオニコチノイド系剤などを散布する。
- ウ 薬剤を選択する際は、収穫前日数に注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
6 ハダニ類 （ナミハダニ、リンゴハダニ）	－	多い（前年より多い）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の気温は高いと予報されている（ /+）。
- イ ８月中旬の巡回調査における葉当たり発生頭数は0.9頭（平年1.8頭）で平年並、同地点率は75.0%（平年58.9%）でやや高かった（ /+）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア 発生の多い園地では直ちに殺ダニ剤を散布する。
- イ 薬剤抵抗性の発達を回避するため殺ダニ剤は１薬剤１回の使用に限定し、かつ作用点が同一の薬剤も１回の使用とする。
- ウ ダニオーテフロアブルを使用した園地では、銅剤（銅を含む製剤）を使用しない（銅剤と混用又は近接散布での防除効果の低下）。

エ コロマイト乳剤は高温時に散布しない（黄変落葉）。

オ 他の殺菌剤及び殺虫剤と混用する場合は次の点に注意する。

- ① コロマイト乳剤はストライド顆粒水和剤と混用しない（葉の黄変、葉裏の褐変）。
- ② カネマイトフロアブルとアリエッティC水和剤を混用する場合は、先にカネマイトフロアブルを希釈する（凝集の回避）。
- ③ マイトコーネフロアブルとアリエッティC水和剤を混用する場合は、先にマイトコーネフロアブルを希釈する（凝集の回避）。
- ④ コテツフロアブルは、アリエッティC水和剤との混用で凝集が認められるので、攪拌しながら散布する。
- ⑤ ダニサラバフロアブルとアリエッティC水和剤又はカルシウム剤を混用する場合は、先にダニサラバフロアブルを希釈し、よく攪拌する（凝集の回避）。
- ⑥ スターマイトフロアブルとアリエッティC水和剤を混用する場合は、先にスターマイトフロアブルを希釈する（凝集の回避）。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
7 果樹カメムシ類 (チャバネアオカメムシ、 クサギカメムシ)	－	多い（前年より多い）

（１）予報の根拠

ア 向こう１か月の気温は高いと予報されている（ /＋）。

イ ８月中旬の巡回調査における被害果率は1.7％（平年0.1％）、同地点率は55.0％（平年14.4％）でいずれも高かった（ /＋）。

ウ 防除適期決定ほ（４地点）における８月１～４半旬のチャバネアオカメムシフェロモントラップへの果樹カメムシ類の誘殺数の合計は396頭（平年38.6頭）で多かった（ /＋）。

（２）防除上注意すべき事項

ア ７月25日発表の注意報第３号を参照して防除する。

イ 薬剤を選択する際は、収穫前日数に注意する。

I なし（日本なし）

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 黒星病	－	やや少ない（前年並）

（１）予報の根拠

ア 向こう１か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ ８月中旬の巡回調査における発病果率は0.0％（平年1.0％）でやや低く、同地点率は10.0％（平年48.3％）で低かった（ /－）。

（２）防除上注意すべき事項

ア 発病部位を除去し、園地外へ搬出して適切に処分する。

イ 落葉を集め、焼却するか土中に埋める。焼却及び埋没処理ができない場合は、乗用草刈り機等で地面の落葉を粉砕する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 黒斑病	—	平年並（前年並）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ ８月中旬の巡回調査における発病果率は0.1％（平年0.2％）で平年並だった（ /±）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア 本病の発生が多い品種は南水、八雲、二十世紀である。
- イ 枝病斑、枯死芽は伝染源になるので切除し、適切に処分する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3 輪紋病	—	少ない（前年より少ない）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ 主な感染期間である６～７月の降水量が少なかったことから、感染量は少なかったと推定された（ /－）。
- ウ ８月中旬の巡回調査における発病果率は０％（平年０％）で平年並だった（ /±）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア 伝染源であるいぼ病斑の多い枝は切除し焼却処分する。幹や太枝は粗皮削りを行う。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4 シンクイムシ類 （モモシンクイガ）	—	やや多い（前年より多い）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の気温は高いと予報されている（ /＋）。
- イ ８月中旬の巡回調査における被害果率は０％（平年0.0％）で平年並だった（ /±）。
- ウ 防除適期決定ほ（３地点）における８月１～４半旬のフェロモントラップへの誘殺数の合計は208頭（平年232.9頭）で平年並だった（ /±）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア 被害果は摘み取り、その日のうちに水漬けし、６日以上おく。
- イ ピレスロイド系剤、ネオニコチノイド系剤などを散布する。
- ウ 薬剤を選択する際は、収穫前日数に注意する。
- エ モスピラン顆粒水溶剤は、長十郎、新高、八雲、愛甘水に対して薬害のおそれがあるので散布しない（葉裏に黒色斑）。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5 ハダニ類 (ナミハダニ、リンゴハダニ)	—	やや多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

イ 8月中旬の巡回調査における葉当たり発生頭数は0.0頭（平年0.1頭）でやや少なく、同地点率は40.0%（平年34.5%）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 発生が多い園地では直ちに殺ダニ剤を散布する。

イ 薬剤抵抗性の発達を回避するため殺ダニ剤は1薬剤1回の使用に限定し、かつ作用点が同一の薬剤も1回の使用とする。

ウ 殺ダニ剤を使用する際は、次の点に注意する。

① コロマイト水和剤は高温・乾燥時や樹勢の弱っている場合は、葉に薬害（黄変落葉）を生じるおそれがあるので散布しない。

② ダニオーテフロアブルを使用する園地では、銅剤（銅を含む製剤）を使用しない（銅剤と混用又は近接散布での防除効果の低下）。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
6 果樹カメムシ類 (チャバネアオカメムシ、 クサギカメムシ)	—	多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

イ 8月中旬の巡回調査における被害果率は0.1%（平年0.1%）、同地点率は22.2%（平年16.3%）でいずれも平年並だった（ /±）。

ウ 防除適期決定ほ（3地点）における8月1～4半旬のチャバネアオカメムシフェロモントラップへの果樹カメムシ類の誘殺数の合計は295頭（平年18.3頭）で多かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 7月25日発表の注意報第3号を参照して防除する。

イ 薬剤を選択する際は、収穫前日数に注意する。

J ぶどう

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 べと病	—	やや少ない（前年より少ない）

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ 8月中旬の巡回調査における発病葉率は0%（平年1.6%）でやや低く、発病果房率は0%（平年0%）で平年並だった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 発病葉や発病果房のほか、落葉も伝染源となるので焼却するか土中に埋める。

イ ボルドー剤（ムッシュボルドーDF、Zボルドーなど）は薬害（落葉）防止のため、クレフノン100倍液を加用して散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 晩腐病	－	平年並（前年より少ない）

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ 8月中旬の巡回調査における発病果房率は0%（平年0.2%）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 発病果房、巻きひげや枝に残っている穂梗の基部は丁寧に取り、焼却するか土中に埋める。

IV. 気象予報

令和7年8月21日仙台管区気象台発表 東北地方1か月予報（8月23日～9月22日）

(1) 予報のポイント

- ・ 6月中旬以降、暖かい空気に覆われ、気温のかなり高い状態が続いています。向こう1か月の気温も、暖かい空気に覆われやすいため、高い状態が続くでしょう。東北日本海側では、期間のはじめ、気温がかなり高くなる見込みです。
- ・ 6月下旬以降、高気圧に覆われ、降水量の少ない状態が続いている所があります。向こう1か月の日照時間は、高気圧に覆われやすいため、東北日本海側では平年並が多いでしょう。

(2) 向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（東北日本海側）

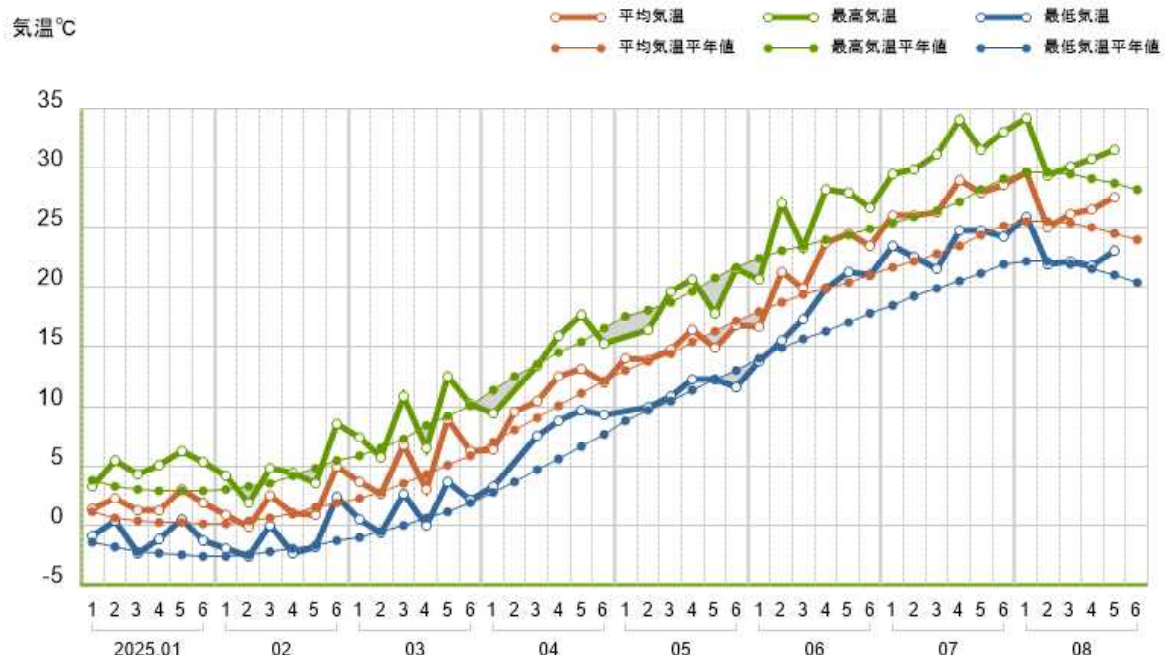
	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気 温	10%	20%	70%
降水量	30%	30%	40%
日照時間	20%	40%	40%

(3) 気温経過の各階級の確率（東北日本海側）

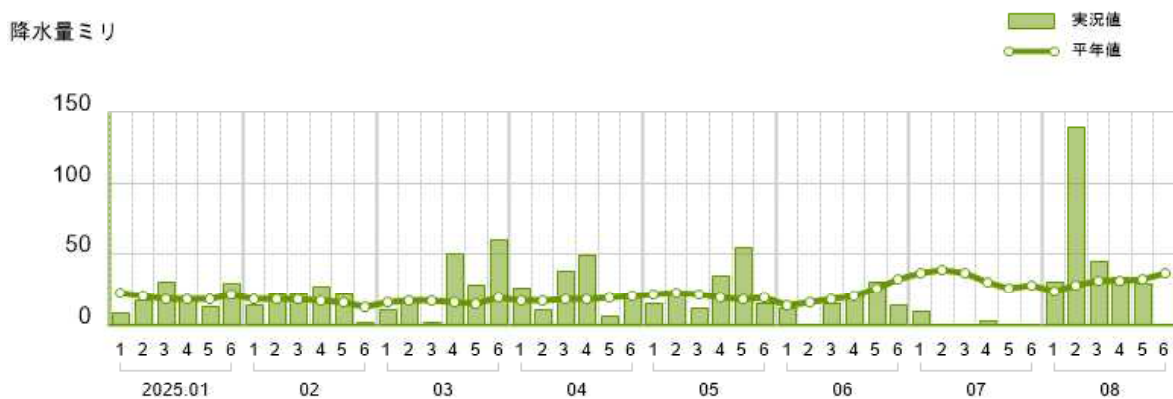
	低い	平年並	高い
8/23～8/29（1週目）	10%	10%	80%
8/30～9/5（2週目）	10%	20%	70%
9/6～9/19（3～4週目）	10%	30%	60%

V. 気象データ (秋田市、1月1半旬～8月5半旬 秋田県農業気象システムより)

気温の推移



降水量の推移



日照時間の推移



VI. 用語の説明

発生時期

平年の発生月日からの差を5段階評価で予測します。

日数	～ -6	-5	-4	-3	-2	-1	平年 発生 日	+1	+2	+3	+4	+5	+6 ～
評価	早い	やや早い			平年並					やや遅い			遅い

発生量

発生密度の平年値からの差を5段階評価で予測します。密度のばらつきの差で示されるので、毎年発生密度が大きく変化する病害虫では、平年値からよほど大きくずれないと「多い」や「少ない」の評価にはなりません。平年値との比較なので、平年値が小さければ、「多い」になっても見かけの密度は多くないことがあります。毎年多発生している場合は「平年並」や「やや少ない」でも見かけ上は多いと感ずることがあります。

		平年値					
度数	10%	20%	20%	20%	20%	10%	
評価	少ない	やや少ない	平年並			やや多い	多い

予報内容の「－」

予報内容の発生時期や発生量の「－」（ハイフン）は、予察対象の病害虫が既に発生している、または、発生時期や発生量が不明なことを示します。

予報の根拠

予報の根拠に示している（ / ）は予察の要因で、（発生時期/発生量）を表しています。

発生時期の根拠の記号は「+」（プラス）が遅くなる要素、「－」（マイナス）が早くなる要素、「±」（プラスマイナス）はどちらともいえない要素を示しています。発生量の根拠の記号は「+」（プラス）が多くなる要素、「－」（マイナス）が少なくなる要素、「±」（プラスマイナス）はどちらともいえない要素を示しています。「空欄」は予報の根拠に関係しないことを示します。

気象予報

出現が見込まれる確率予報は、高い（多い）確率が50％以上の場合は「高い（多い）」、低い（少ない）確率が50％以上の場合は「低い（少ない）」となります。低い（少ない）確率が20％で平年並と高い（多い）確率がそれぞれ40％の場合は「平年並か高い（多い）」、低い（少ない）と平年並が40％で高い（多い）が20％の場合は「平年並か低い（少ない）」となります。また、それぞれの確率が30～40％の場合は「ほぼ平年並」となります。

出現確率(低い(少ない):平年並:高い(多い))	解 説
高い(多い)確率が50%以上	高い(多い)
(20:40:40)	平年並か高い(多い)
平年並の確率が50%以上	平年並
(40:30:30) (30:40:30) (30:30:40)	ほぼ平年並
(40:40:20)	平年並か低い(少ない)
低い(少ない)確率が50%以上	低い(少ない)

半旬のとり方

ここで扱われる「半旬」とは暦日半旬のことで、毎月1日から5日ごとに区切った期間となります。1半旬は1日から5日まで、2半旬は6日から10日までであり、以降6半旬まで5日ごとに該当する期間を指します。

農薬の適正使用・管理の徹底を！

農薬使用にあたっては、十分な注意のうえ、安全かつ適正に使用してください。

○ 安全使用の基本事項

- ・ 農薬の使用基準を遵守する。
- ・ 病虫害の発生状況を把握し、必要最小限の農薬を使用する。
- ・ 防除履歴を必ず記録する。

○ 農薬使用上の注意

- ・ 農薬の散布時には周辺作物に飛散（ドリフト）させないようにする。
- ・ 家畜や蜜蜂などに影響のある農薬を使用する場合は、地域内の畜産農家及び養蜂業者と緊密に連携し、散布日時や散布地域、使用農薬の種類などを散布前に確実に周知する。
- ・ 農薬散布後は散布器具の洗浄を徹底する。
- ・ 特に、土壌くん蒸剤は使用上の注意事項を遵守する。
- ・ 農薬散布作業にあたっては、装備と体調を万全にする。

○ 農薬取扱い上の注意

- ・ 農薬は保管庫に入れ、施錠して保管する。
- ・ 農薬を他の容器（清涼飲料水の容器など）へ移しかえて保管しない。また、食品と一緒に保管しない。

問合せ先

秋田県病虫害防除所 TEL 018-881-3660
秋田県農業試験場 TEL 018-881-3326

秋田県果樹試験場 TEL 0182-25-4224
かづの果樹センター TEL 0186-25-3231
天王分場チーム TEL 018-878-2251